Mitzho"mumpan" Nakata / Uncollected Poems : 2022 to 2024

"A Psyco killer Without Agony" / ChapBook : 4

ampp-027

a missing person's press

夢のスケッチ **2**

睡眠 **4**

error code:721 **6**

真夜中と半分 **8**

検査 **10**

おれが愛に気づいたとき、その愛がおれに語ったこと **11**

窓をあける **14**

黒犬の眼球 **16**

ブコウスキーの朗読 **17**

性典 **20**

クール誕生 **22**

レミング **24**

リチャード氏の埋葬に寄せる余興 **26**

週明け **29**

花祭り **30**

金魚 **31**

ヨナの呼び声 **32**

Psyco killer **33**

裏庭日記　**36**

孤独のわけまえ **37**

窓がある風景　**38**

守護天使たちの休息　**39**

猫――あるいはイギリスの夏　**40**

夢のスケッチ

かれは衣装入れに手を突っ込んでなにかを探している
それは去年のセータかも知れないし、水色の恋かも知れない
台所では子供たちがきのうの誕生会を回想している
もしかしたら、ケーキが少なすぎたのかも知れないな
そうかぼやいてなにかを探している
でも、それは朝からずっと見つからない
見つからないのはかれ自身だった
自身を探しているんだ
自身を探しつづけているんだ
だんだんと暗くなる室で、
鳥の声がするのはどうしてだろう？
かれはすっかり憑かれたみたいに家をでてさ迷う
見えるものがすべて、いままで見えなかったみたいに感じられる
棲み家を失ったひとびとがまた、
業務スーパーでピケを張っている
なまえを失ったひとびとがまた、
ドン・キホーテで焚き火をしている
囲むのはかれの夢、
封じられたのはかれの躰、
ひらかれた扉などひとつもない通りで、
深海のダンスパーティが頻発して、
もはや顔を失ったひとびとがグリル・チキンを陳列する
猥褻な足がいくつもならぶ国道で遅れて来た女がスカートをたくしあげる
いくつもの過去、そして失われた夢と憧憬たち
かれはじぶんがだれだったかをおもう
おれは名もない虹鱒だ――かれはおもう
だれかがなまえをつけてくれるのをかれは待つ

夏が反転する時間までにたどり着く必要があった
けれども場所はどうしても判然としない
約束されたところがあって、みながそこへむかうのに
どうしたものか、かれにはわからない
グラスがわれた、乾いた音を発てて
長い廊下を歩いていたような気がする
あるいは短い階段を上りきったような気がする
子供たちがベッドにむかって疾走する
飛ぶ夢がいま必要だと気づくころにはもう、
かれのなかの家は解体つくされ、
なにも残ってはない
顔を失ったまま初恋するようなまちがいが、
あちらこちらで明滅している
敵はいったいだれなのか
気づくと駅だ
じぶんには家も子供も、そして衣装入れすらないことに気づく
じぶんが欲しかったものに復讐される夢を見たんだ
かれは鏡にむかって微笑み、そして分断された現実のなかで、
つぎの列車を待ちながら一冊の本をひらくのだった。

睡眠

ただわたしは歩みたい
ただわたしは眠りたい
それだけのことも全うできない夜、
星のあいだを明け抜けた車が、
コインパーキングで失踪
そして明滅する靄のなかで、
亜空間へとたどり着く幻想を
わたしは確かめていた
多くの死や、
見向きもされない生に縛られ、
なにもかもが耐えられないとき、
金平糖みたいな甘さで、
書物が転がって、
深夜の詩集がわたしを呼びかける
わたしがでていこうとした場所から、
2米70糎はなれたところで、
まるできみが話すみたいに
話すんだ
でも、わたしは詩集を閉じる
もうここまで来て、やめるわけにいかない
戸口を過ぎて裏階段を上ると、
星間連絡船のあとを、
いっぴきの犬が追いかけている
ああ、眠れない夜のなかで、
こんなにも寂しい花が咲いていたとは、
気づかないでいたのだ
星の墓碑銘を

検索する一群との、
ささやかな邂逅がいま、
2連めの3行から始まろうとしていることに
結果を表示したモニターから、
わたしの過去に至るまでの導線、
みながひとであったことの痕跡、
たとえようもない悦楽と混沌がつづく生活のなか、
わたしもひとりの沈黙に過ぎなかったという事実とともに
きみの寝顔を空想しながら、
この夜という夜を歩くしかないという予感のなかで、
いま、――水を呑む。

error code:721

コピー用紙のうらに書かれたおれの調書が
夜に発光するさまを12インチのフィルムが捉える
ものがみな逆さにされた室で、
朱い内装のなかで男が、
朱いベッドのうえで泣いてる
こいつはだれなんだ？
やがて男の妻がやつをなだめる
「どうしてなにもかも朱いんだ」ってやつはいう
でも、それはやつの内奥の色でしかない
なにも逆さになどなってはない
欲しいままに切り取られた裸体をばら撒き、
キャベツ男の頭をぶち抜く
弾丸のうえを街がよぎる
38口径の夢の址で

コピー用紙のうらに書かれたおれの調書が
踊り狂う芒原に今年も鰊が豊作だ
そう聞かされたのは朝の4時
突然の電話、そして盗聴された会話
内容の断片が次々とメディアに横溢するのを
おれは黙って終夜営業のダイナーのテレビ画面から、
秘密の電波で聴いていた
かつて愛した女が知らない男に抱かれている
アパートの2階にはずっと闇が光っている
「どうしてなにもかも朱いんだ」ってやつはいう
でも、それはやつの内奥の色でしかない
おれは支払いを済ましてでた

女も建物の戸口からでた
すべては9年まえのまぼろし
われわれは――という辞を信じないおれは
たったひとりで17系統のバスを待ちながらも、
来年、40で死ぬことばかりを考えている。

真夜中と半分

どうやら逃げることを忘れた兎みたいに
この町に棲み、そしてこの町を愛してるおれ
幾度もおもった逃亡幻想たちが
見えなくなるまでに
えらく時間がかかった
室のものを売っ払い、
美佐島の集落にいったこともある
でも、そのたびにおれは失意を味わい、
もう２度と逃げだすまいと誓って来た
おれはこの町でしか生きられはしないこと
それを覚ってハンドルを命一杯切った
バーストするタイヤの臭い
救急車が通り過ぎる
なにもかもが隣人となった場所で、
過去との邂逅がもはやくその役にも立たないのを
掲示板が報せてくれるからか、
おれはおれに授けられたものを眺め、
そしておもむろにスイッチを切る
噫、そうだ、この痛みだよ、
いままでさ迷った土地をぜんぶ忘れさせる妙薬は
０時半の静けさ、燃える塵の日を守って、
おれはみずからの迷妄を焼き払う
遠く遠い読書の時間のなかで、
おれがおれにいう

　内容はすごく淡泊で、
　あまりわたしの好みではない。

ただささやかな心身の動き、
その注視に感心させられた。
《彼女は片手をあげて目にあて、
少しうつむいた。肩に置かれたハワードの手に力が入った。
それからその手は首の方にあがって来た。
指が首の筋肉をこねるように揉み始めた》。
じぶんの文学に欠けた部分をそっくりいいあてたような文章（2010/08）。

なにがあったのかはわからない
かつてあったはずのものが見えそうで見えない
ノートの断片から宵闇の小道へと繋がれる抒情が
果たしてだれのものなのかを確かめながら、
いまはただこの町を愛してあるんだよ、
――だから失せな。

検査

非破壊検査だとかれはいった、
冷蔵庫の林檎から核物質を取り出すんだといっていた
それはまだうら若い午後のこと、それは死を知らない午後のこと
１分間に数万回のスリットを通過する物質がおれの弱い心に侵入する
かれは小さな笑みを浮かべ、タイムマシンに飛び乗った
かれ自身が核となって宇宙に飛散する瞬間をカメラが撮る
気がつくとおれはいつものベッドのなかで、
卵の殻を剥いているのはどうしてか
あらゆる涙、その意味性に沿って展開するはずだったおれの亡霊たち
かれらはもはやいない
だれも破壊されないところで、より多くの欲望に倦き、
そしてきれぎれになって去ってしまう時間
その断面から流れだした血が、
やがてすべての窓へ侵入するまでに
おれはさまざまな両の手と絡みあって、
そして明滅する星のなかから、
たったひとりの死を探す
生きがいを失った果てに検査された林檎を齧る
核物質は無事に発信されたんだよ
おそらく新しいシーツのなかで
おれが呼びかけた、
なまえも知らないゆうじんたちがいまに手を、
手をひろげておれを迎えてくれることなんかを妄想しながら、
またいつもように朝餉の支度を忘れるだろう
それがたとえ破壊を呼ぼうとも。

おれが愛に気づいたとき、その愛がおれに語ったこと

どこか見憶えのあるような、
なだらかな空気のなか硝酸系の毒物を蒔く
愉しそうな子供たち、大丈夫もう終わりだから
地下鉄工事の終わらない夏休み
眠れない夜をいくつもいくつも数えた、
だけれど、それ、ぜんぶ終わるから。
だから緊急脱出ハッチにはふれないでおくれ
かれらかの女たちはぜんぶきみのもの
きみがわたしを閉め出すための舞台装置
きみはきみのなかに拒絶を孕んだ、もちろんこちらにむかって
わたしに預けられたはずのあかるい未来、そして来なかった未来、
ガラス戸のむこうで
いまも存るかも知れない未来について考えるのはもうやめだ
計画はみんな中止、
愉しみはぜんぶ忘れろ
欲しいものは全滅だ、すべてを清める塩だ
成分表示を朗読するような人生を投げ棄てて祈る
子供たちをみんなきみのそとからだして此所にいるんだよ
破綻と快楽とを融合された手で、その毒をふりあげろ
いやだ、いやだと泣きわめく子供たちがいるけれど
データ消滅まで時間は1時間を切ったんだから逃げたってむだだよね
できればきみを保存したかったんだ、この地下を流れるだろう鉄路の壁に
きみの人生だったすべてを、ありうるすべての可能性を、
階下から沸き上がるデスコティックな声援、突然のメール、
あなたにぴったしのご案件があります。
高収入まちがいなしです。つづきは→■
きみはまだわたしのことをおもっているのか、ほんとうにそうなのか

いくつもむなしい夜をその痛苦とともに過ぎるしかないときに
毎秒ごと髄液のなかで神経伝達物質があるひとつの命令をくりだす
あなたからあなたにとってもハッピーなお知らせです。
かくも深い迷いから醒めるからにはあなたの死が
絶対条件となりますので、ご容赦ください。
きみは素晴らしい、ただ素晴らしくて、
その意味するところがよくわかない
防毒マスクを外せというのか？
この喧噪のなかで？――くたばれというのか？
きみを愛するわたしは此所で消えてしまえばいうのか
ならば告げよう――きみなんか、うんこ召し上がれですと！
胸の甲板を突き刺したいくつもの槍が、カシウスの槍が、
わたしにはきみの愛であったなどとは幻想しない
討論もなく、和解されるだけの世界なんざケツ喰らって死ね！
わたしはもうやめた、――おれはこのままじゃ死なない！
おれの全歴史と時間の考古学によって発掘される未来でいまと心中する！
ああ、そうともおれはおまえを見限った、
そして電気冷蔵庫に改造すらしたさ、
でもあれだっていまおもえばおれなりのやさしさだって
もう気づいたっていいだろう！
おれが軽薄だったことなんかいちどだってない、
いつもほんきだったはずだ！
子供なんかつくってもそんなものは抵抗にはならないぞ！
それがこんなところから、まさか綻び始めるなんて、――いッ！
つーッ、いてエなぁ！――こんなものが愛だったなんてな！
これはおまえへの愛じゃない！――おれからおれへの愛！
ゲートの通路上にだれかが立ってる、いや消えた、
消息不明、人体センサー反応なし、えっ？
おまえばかだろ、おれは現象学の話なんてひとつもしてねえぞ！
待ってて、ゲートがもうひらくよ。

おい、ばかやめろ、――死ね、――殺す！
子供たちが進んでいくね、――もういくんだね
光りのなかで涙を拭いた子供たちがその腕から未来へと侵入するだよ。
勝手に進めるんじゃねえくそったれ、おまえ死んでろ
なにいってんだ、おまえもおれだろ、おれのはずだろ？
おまえのくそみたいな音楽趣味にずっとつきあってきたし、
映画も観たし、デートにもいったろ、いまさら「いやです」なんでいうなよ
それでいままのところ、痔の痛みは治まってますよ、先生。
次の予約はいつでしたっけ？――え、もういいって？
「もういいです」ってなんだよ、おまえ！
だ・か・ら、ダダイズムの時代は終わったんですよ、
いまから子供たちの迎いがあるのでついて来ないでくださいね。
どこか見憶えのあるような、
空気のなか硝酸系の毒物を蒔く
粒子を超えたなにかから現れたきみの、
愉しそうな子供たち、
大丈夫もう終わりだから
地下鉄工事の終わらない夏休み
眠れない夜をいくつもいくつも数えた、
だけれど、それ、ぜんぶ終わるから、
だからおれを此所からだしておくれよ、もう、ぜんぶわるかったから、
ただきみとふつうに話がしてみたかっただけなんだ、おれって、

窓をあける

羽根を忘れて取りにもどったのは11時半で、
きみのいない室から、やはりきみのいない室へ移動した
きみのいない台所で、きみの指紋のないコーヒーを淹れた
少しばかり息を吐き、そしてじぶんがひとりぼっちだという事実
赦されないことをしてしまった幾年もの時間
こんな日にかぎって身動きがとれない
おれの射程のなかにはもうきみがいない
だのにこうしてぶざまにきみをおもいつづける、
おれをきみは笑ってくれるだろうか
なにもかもが見えなくなった室で、病に魘されたじぶんを見つめる
こいつには希望も展望もない、ただただ老いてしまうことに恐怖しながら、
おなじステップのなかで腐ってしまうだけなんだ
もう終わりだ、終わりにしよう
きみのいない世界から飛び降りて死ぬ
それだけがおれの望みなんだろう
いくつかの絵を焼いた
水の洩れた鍋が音を立てて消える
おもうにすべてにとって都合のよい死はないんだ
残された物質には申し訳がない
でもここまでやって来て、
おれはほんとうに幸せだった
おれは少しでもきみを知れた
おなじように少しだけきみに伝えた
わるかったのは精神とタイミングだった
もしもあのときに――そうおもうことはある
だけどもはや意味をなさない
おれは羽根を棄てて窓をあける

いつものような世界があって、それはとても幻滅させる
いつものようにきみのいない場所でかざむきのちがいもわからない
それでもここまでやって来たんだ、――それを赦そう
そしてなにごともないように
おれのいない世界へと飛び立つことにしたんだ。

黒犬の眼球

慈悲とつれあって深夜のスーパーを歩いた
あるいは慈愛とつれだって萩の花をばらまいて歩いた
おれたちにとっての幸運が猫のしっぽであったような、
あるいは取り残された者たちの最後のワルツであったような、
そんな心持ちで郊外を歩いたんだ
まだうら若いきみの心臓にはどうやらとどかないようだが
いったいどれほど距離をおれたちは歩いたのだろうか
慈悲はいう――おまえに救いがないと
慈愛はいう――おまえに愛はないと
ひるがえったマントに黒犬の眼球を光らせて、
おれたちのまえをいまきみが通り過ぎてゆくんだ。

ブコウスキーの朗読

for an album ”Radio Bukowski” by Charles Bukowski with Guilherme Lucas

え？
なんだって？
おれは――英語がわからない。
ね、――そうだっていったろ？
聞えるか？
なら水をくれ、
水でいい、
ふつうの水でいい、
炭酸水でも、
天然水でもない、
水道水に氷だ
氷はなくたっていい
だから、
水でいいって、
早くしてくれ
水だよ
つづり？
そうか、
ならw/a/t/e/r だ
え？
英語わからない
ビールはいらない
ほかの客とはおなじじゃない
金はだす
水をだして

くれよ。
だっておれは詩――人なんだよ。
それであんたは何――人なんだ？
くそっ、なんて熱い水なんだ！
hot water musicだと？
ふざけるな！
夏はきらいだんだよ。
え？
ニホンゴワカラナイって？
オレニモワカラナイヨ
水銀色した車が、
こっちに来るぞ。
まるで、
自由を失った、
蛙みたいだね
おれは夜、
いつも、
かれの声を聴いてるよ
すると落ち着く
いままでにあったすべてを英訳することはできない
いままに書いた詩をすべて英訳することはできない
だれかが叫んでる
男の声――「カモシカを救え！」
だっておれは詩――人、
だってかれは死――人、
英語がわからない
だのにかれの朗読を聴く
そして夜の足もとが覚束なくなった頃合い、
おれはもうひとりのおれとかれについて語っているわけさ
え？

なんだって？

おれは――日本語がわからない。

性典

姉と妹を持って生まれたことが不道へのことはじめ
おれのさいしょのまちがいは男の遊びを憶えなかったこと
男のなかにおれの仲間を見つけられなかったことだ
山口幼稚園での脱走ごっこ
ひとり遊びの世界に迷ってしまった身分ゆえに
おれにはまだ語り合う友がいない
夢中になれるのはひとりごと
子供番組の悪女たちがおれにとって性典だった
かの女たちをおもい、おれはつよくおもったものだ

やがて13になって、はじめてエロ本を買った
いまでも懐いだせる、川島和津実、沢田舞香、いのうえ梨花、
吉崎紗南、上原あやか、風野舞子、友崎りん、――そして大勢の無名人たち
大人でないことを憎み、子供でいることに甘えていられた時代
おれがたったひとり探りあてたページをだれかが運び去ってしまうまえに
おれのなかで永遠に閉じ込めてしまいたかった

いま残されたのは近眼のおれ
なまえを渇望しながらいまだ無名のおれ
切り取られた街区でだれの恋人でもないおれ
ダイアローグの機会を見失った40男のおれでしかない
あらゆる呼び名、そのどれとも関係のないおれでしかない
それでもポルノとエロチカを求め、探りつづけるおれ
おもいでとはもう和解できない
ひるがえる地平の彼方でおれはたったひとりのオナニストで、
自身のエロトピアを探求する疎外者でしかない
燃えあがる旅客機、繰り返される爆発で

飛び散ったはずの過去というパズルを
拡大しつづけるのだ
夢のなかまでも。

クール誕生

for 0

ことばのなかではどこだってゆける――19歳のぼくはそうおもっていた
するとこの世界はどの現在をたどっているのか――40まぢかのおれはおもう
乾いた助辞と接続詞をやりながら、わたしはやってきた
迷いと索漠のなかで準急列車が梅田にむかっている
わたしは入り江を求めてさ迷う釣り人みたいに
この畦にたどり着いたんだ
きみはいまどこにいる？
きみはなにを撰ぶ？
風上に立った老人たちが石蹴り遊びをつづけるように、
きみも縁日の世界へと旅立ってしまうのだろうか
やめておくといいい、
あそこにはもう航海日誌が残されただけだ
星のコスプレをした退屈人たちが立ち上がる沖で、
いまいちどわたしたちは叫ぼう、――＃yeah!!!
たったそれだけのあいずで町を滅ぼせるから
関係はまやかしだ、
もはや譬喩に立ち上れない
大きくなった子供たちが
不意に過去へと立ち返るはめになったときに
わたしたちの心臓を交歓させて、
それぞれ別の山に登る
右の烟、左の烟、
それぞれ翳んだ景色のなかで、
やがてふたりの信じるものを生け贄してでも、
クールの誕生を送ろう
クールの誕生を生きよう

ひとりぼっちの砂漠で見つけた魔術館が博物館でかったとしても、
もう逃げるのは赦されない、かくれんぼももう終わりだ
果てのない宇宙で知り合った衛星とともに、
見失った口唇期とともに、
この世界をクールに逃げ切ろうぜ。

レミング

ひとたび渇いた魂しいは舌のように膨張し始める
軍備を払う金が政府にはあるはずだった
敵は身近な隣人を人質にとった
でも政府は動こうとしない
あいつらはおれたちを
見棄てたんだ
愛にうらぎられたひとたちがたどり着く駅で
なまえを奪われた犬がおれを探してる
気をつけろ、
抗って、
怒れ
やがて果てるときにそなえて、
人皮の靴をつくれ
支那人の大群が全体主義を呼び寄せる
世界にあぶれたムスリムが瞞し伐ちを呼びかける
ああ、もっと中継してくれ
そう、もっと中継してくれ
撰ばれた民を自称する幾千の痴れ者がテレビ画面にひろがって、
左翼のやつらは夢を語りつづける
右翼のやつらは大義を語りつづける
だが永遠に大人にはなれない
性的倒錯を多様性といいかえる現在で、
cant と dick のちがいがわかるか？
メラネシアの奥地で、
iPhoneをなくした少年がやがて兵士になるまで、
どれほどの経験が必要なのかを算えてる
夢を奪われた人生を質札に変えて、

抵当墜ちになるまでにずっと
ずっとおまえの名を
喚びつづける
燃えろ、
おれにつけられた値札よ
燃えろ、
レミングの群れよ
けものの牙にはさまれ、
惨めなものに変質した存在よ
あたらしく産まれる子供たちに顔向けなんてできない
とてもできやしない
おれたちは等しく卑しいレミングの群れだ
だれかがいう、
地獄の番号を算える術を、
虚構を生きる術を学ばされ、
送りだされた社会に愛がないからと、
それぞれの集団死をいま始めるんだってな。

リチャード氏の埋葬に寄せる余興　2.05.2013

リチャード氏は
24時間営業の
駐車場に
掘られた
穴のなかで
からだを埋められてた
レスターでのことさ
その穴は
忘れられてしまったけれども、
つい先日掘り起こされた
かれは至って正常だが
ヘンリーやボズワーズと戦った1485年
味方の裏切りによって、
戦死したためにひどい人間不信に陥ってしまってたんだ
かれのからだはやがて丸裸にされ
かれの支持者たちに
かれの存在を報せるよう曝され
かれはいささか不機嫌だったらしい
そしてお次はグレイフライヤーズにある、
修道院に埋められた
ということなんだ

ことのはじまりはこうだった
ジョー・アップルビーという骨学者がはじめに頭蓋骨を見つけた
頭の傷をみながら、
「スコップやなんかで傷がついただけかもしれねえ」
「まだなんにもいえねえな」

そうおもったという
そして背骨を見つけようと探していたが、
そこには腕と脚しかなかった。
リチャード氏はせむしだったため、
背骨のかたちが重要となるだろうな

まったくべつの場所の作業員から
「なにかある。みたほうがいい」
そう声がかかった
「いや、忙しいんだ」
でもジョーは断った
「でもかならずみたほうがいい」
いってみればそこに布で包まれた残りのリチャード氏があった。
そしてあきらかにせむしだった
王の埋葬だというのに
柩もなく白い布だけでかれは眠ってたんだ
それってかなしいよね、三世さん
ぼくはあんたのことをなにも知らないのに
焦げてしまった鮭をみるたびにあんたのことをおもいだしてしまうんだ
どうしてなんだろうか、まるっきり昔しの歌じゃないか
でもこれでもう騒音に悩まずに済みますよ
では

追伸；

リチャードさんへ、
気に入った自動車はありましたか？
なにが好きですか？
ドライヴへいきませんか？
それでは

20代の日本人より

週明け

シルヴィア・プラスの遺体写真を眺めながら昼餉を片づけていた
ガス・オーブンに突っ込まれたかの女の上半身、
死の直前に最高のユーモアを発揮したという、
モリッシーの言葉を懐いだす
おれにとっての『ベル・ジャー』はいまだ
いまだ見えないままで

遙か未来にあるだろう、展望だろうと希望だろうと、
そんなものなんかハナから信じちゃいないおれだって、
少なくともじぶんの死を観察し、批評するぐらいの場所と時間が欲しい
だっておれ自身がおれの最高の観客だから
汽笛の聞える丘でドアを施錠する

意味論のながい道を逆走してここまでたどり着いた
だれかがおれを見守ってくれていればいいとおもいながら
そんな幻想を永久運動させながらたどり着いた
なおもおれを孤独のうちに疎外する現在をあざけって、
花の蘂のような心を鳥の姿に鋳造して来られた

なんだってこんなところに萩の花が
それにいま時間にどうして配達人が
おれはとまどってガス火を入れる
大鍋で茹だる赤インゲンの匂い
香辛料とトマトの赤い色
いままさに始まった戦いを実況中継してくれる七人の花嫁を
いまになって求めてやまないんだ。

花祭り

ひらいたままの頁と
赤ペン
ペーパーバックの著者校正
みかぎられてしまったおれという男
花祭りの顔役を待っている、
永遠とともに。

金魚

真夜中じゅうずっと悲しいニュースや情勢に耳をかたむける
おれの辞書にだれかが書き加えた永遠のせいで、
眠ることもできないから
雨が降りやんだ、その沈黙を
だれかがやぶって来るのを期待しながら
やはりだれも来ないのだという予感
愛のないまなざしをみずからにむける、おれのよすが
金魚は鉢のなかを一回転する、
かの女は素晴らしい
おれもかの女のようにぐるぐると泳ぎつづけていられたらとおもう
終わってしまった寸劇のように儚く、幼い賭けだった人生
最後のページを彩るはずのヒロインはいない

夢想のなかで、
出会った数々の酔狂人ども
偶然と渾名された少女がスカートをゆらす場面
破壊された駅で迷子になった大人たちが心臓を剔る
湯をくぐっておれは浴室をでていった
またしても雨が夜を撲りつける
亡命詩人が暗殺されたあたりでストップされた画面を
旅客機が横切ってゆくようなまぼろしのなかで
金魚は消える、――白い焔のなかで
そしておれはようやく永遠から
逃れたんだ。

ヨナの呼び声

求め合うことを知らないままでかれの到着を待ちつづけている
待合室が暗くなるまで待っていて、そして立ちあがる
おれもあなたもよそ者同士で、それを口にしない
だれもない劇場で、コラールがする
ある種のやさしさ、そして虚構

いままでに見たこともない速さで、タクシーが過ぎ去る
丘の上を夢想する遊動円木の少女たち
みずから撰びとった災厄に焼かれ、
天使の末裔と渾名された窓よ

かならず、あなたはもどって来る、そう信じたときもあった
出口を見失った回想がつづく３番めの室から
手をふってあどけなく応えたこともあったのに
いまや、ずっとずっと此処で、
ヨナの呼び声を待つのだ。

Psyco killer

リナ・サワヤマのNME最新記事、トーキングヘッズ、ザ・ポップグループを片手に

芝の泥濘みにつまづいてふりかえったときには
きみの寝室から火の手があがっていたんだ
おれにはよくわからない
おれのことぜんぶが
やがてサイレンが迫るなかで、
電気工作の授業のとき厭な教師のばかたれがおれに囁いた言辞とか、
舌がからみそうなほどに不愉快な父親の長い説教だったり、
スイッチの切れたテレビみたいに冷たい母親の態度やなんか、
クラスメイトの生徒会長が話したくそ過ぎる業績だとか、
あまりにも急な幕開けでおれの頭が喋り始めるんだ
きみの望みは叶えられないし、
そもそも望みってなんだ？
おれにも教えろよ
家々が遠ざかって、
霧のなかへ這入るのはいったいだれの番だい？
きみにもきみの友人たちにも教養ってもんがなかった
だからすべてを棄てて火をつけた
だからすべてを棄てて走る
審判などケツ喰らえ
イギリスでユダ公がいった、
――「日本は幸福だ。街が破壊されたことで発展をとげた」ってな
だったらおれはこういうぜ、
――「ユダヤは幸福だ。民族浄化のおかげでじぶんの国を創れた」とね
糞でも味噌でも浴びるがいいぜ、でもおれは知らない
でも、おれは知らないんだ
猟奇殺人者？――なんなんだよ、それ

原水爆の父を慕うなら、
ガス室の父もたっぷりと愛さなきゃね
おれたちゃ、やつらにとっていまだに人間じゃないらしいぜ
きみなら笑えるだろ？
やつらにとっていまだに人間じゃないらしいぜ
きみなら笑えよな？
いまだ人間じゃないらしいぜ
ハッハと笑ってろよ
きみが人間じゃないことをハッハ
エテ公に過ぎないおれたちを人間扱いするのは金だハッハ
値札がすべての決定権を肯定するんだハッハ
愛のないセックスの果てで
おれは産まれた
セックスのない愛のなかで
おれはきみに見蕩れた
すべては過去のこと
過ぎ去って消えた映画評論の見出しってやつで、
くれぐれもおれに触るな
帯電したまんま、
魔法がとけないんでね
くれぐれも用心しな
おれの渾名は”you fuckin’ so much”――ゴクロウサンってことだ
逃げろ、
もうじきおれの乗せられた警察車輛が崖を突っ走る
逃げろ、
転落する車のなかで最後の逃亡を夢見ながら、
逃げろ、
きみの残像にむかって儚い射精をするんだ
逃げろ、
逃げろ、

逃げろ、、、、、

裏庭日記

われわれという辞がいやで、つねに単数形で生きてきた
なにをかたるにもひとつに限定してからでなければ安心できない
おれたちや、ぼくらといった主語を憎み、空中爆破したくなる
おれは決しておれたちじゃないし、
おれは決してぼくにならない
あらゆる咎、そのどれともちがう声音で、
おれは喋ってきたし、裏庭を見ながら、
父の暴虐に耐えて来た

かの女たちはもはやどこにもいない
スタンドにも学校にも、あの長い修学旅行にさえも
終わってしまった時代、その光景を映写しては頭脳に水が湧く
閃きのなかでもどらないまぼろしを追いかけようと足掻くおれ
友だちなんかいなかった、仲間なんかじゃなかった多くのひと
夢の落下する速度を物理学では習わなかった
おれの学習が断念された復讐を撥ねのける
母の無関心に耐えて来た

やがておれは立ち上がる
たったひとりで丘にあがる
だれもいないところで日記を書きつづける
おれを嘲るだろう、百億の妄執とともに生きながら
かつてあったかも知れない展望や選択肢とか、
あの娘の乳房のふくらんみだとか、
そんなくだらないことに挫折を憶えてしまうのは
姉や妹たちの黙殺に耐えて来たからだ。

孤独のわけまえ

ロージー・フロストにかかわる男はみんな死ぬ
薬物中毒のかの女はじぶんにかかわる男たちを殺す
兄のハンク以外のすべての男を裏切ってきた
最期には組織の男スコフスキイでさえも
顔ごと吹っ飛ばしてしまった
かの女を愛した男はその次の瞬間、心臓を失った
そしてまた兄の腕に抱かれ、
薬に手をつける
「愛とはセックスの誤植」に過ぎないのか、
ハーラン・エリスンの書物に疑問符を突き立てる暇もなく、
死んだ日本人、
ドラムの滝田と、ギターの野崎は幽体のまま車で州幹道路を突っ走る。

孤独のわけまえが欲しい
肉体と肉体を繋ぐのは端金でもかまわない
でも――とおもう、
魂しいと魂しいを繋ぐものは金じゃだめだろう
いくらあっても手に入らない砂漠の赤い花みたいだ
わたしの心とだれかの心とを繋ぐハイウェイが欲しい
深夜放送のノイズのなかで明滅する交通情報
わたしのなかのアメリカをあまねく照らす銀河は
いまのところ、品切れ中である。

窓のある風景

叫びのない窓が額装されるまでに
まずは県民会館で
エッチングとして公表された
田舎者たちにかこまれ、
曝された色彩が
夜ごとかれらのなかで這入って
やがて追放された

叫びのない窓が額装されるまでに
イギリスの小さな個展で
散文藝術に複製されるかたちで
ひとびとのまえにだされた
ひどく脅えたガラスのなかで
膨張するひとびと
夜ごとかれらのなかで破裂して
画廊ごと焼き討ちされた

叫びのない窓が額装されるまでに
多くの時代が過ぎ去っていった
手の届かない納屋のなかで
それが発見されたとき
若い男は窓を額に入れて
叫びのある窓に変えてしまった
夜ごとかれのなかで砕け、
閉鎖病棟の一角でいまは忘れられている。

守護天使の休息

午後まで晴れていたのに
それからはずっと
降りやがって
いまはもうちがった肉体が
駅を拒みつづけるのはいったい、
どういった理由なんだ、運転手さん
おれが待っていた、すべての休息のなかで
頬笑んだはずのものが泣いているのに
バスがでないのは天候ばかりが理由じゃないんだ
おれは最後に頬笑みたかった
だのにやつらはおれを地上に巻き込んだ
時代遅れの拷問器具でおれの躰を否定する
熱く腫れ上がった肛門に毒汁を流し入れたんだ
こんなことが罷るところでいったい、なにをいえばいい

気がつくと、
おれが泣いていた
喪ったものは蒼穹だけじゃない
渇いた舌をねじり入れられた思想というまちがい
ホテルの裏口へとつづく廊下の途中で撲られた後頭部の詩学
踊れなくなった怪人たちが調理場の革靴を塩素剤で調理しているなか、
おれはおれを諒解できず、ヒロインのゐない人生を賭けて、
ブリッジをくりかえしたんだ
語り手の死をアナウンスする最期の駅のスピーカーが
きみやあなたの心臓を要求する
なにもやるな、なにも応えるなとおれはいう
こんなことが罷るところでいったい、なにをいえばいい

小説はもう読まない
小説という死が伝染する通りで、
２度目の事件、
複製された事件を
追いかけることはできない
花と卍をとりちがえたひとびとのまえで飛行機を撃ち落とす
みながみな、おなじように傘の隠語をくりかえすなかで
おれはいままでにない痛みのなかで
鎮痛剤もなく、患部を抱えながら書いている
守護天使の休息が終わらない場所から、
短波ラジオを受信するんだって。
こんなことが罷るところでいったい、なにをいえばいい？

猫――あるいはイギリスの夏

レイモンド・チャンドラーの猫はタケというなまえだったのだが、
来訪するアメリカ人たちの発音によってタキとゆがめられ、
図らずも、bambooからwater fallへと変身した
われわれはなにかを誤解すること、
おもいちがうことによって、
世界というものの真に近づくのである

イギリスの夏は遠い
手のひらが熱くなる午後の港
たったいま交わした約束がでたらめだったと
吐きすてることもできないいまま客船を見送る

どこにもトポスを持てない、
われわれの世代
悲しい一撃を求める孤独の果てで
われわれはきみをもういちど抱きしめたい
われわれは猫のなまえのように変容するなにかでしかないのだから。

"A Psyco killer without Agony" / ChapBook : 4

ampp-027

著作・装丁・編輯・発行＝中田満帆

発行所＝ **a missing person's press**

発行日＝ **2024** 年 **09** 月 **30** 日・初版

〒 651-0092

神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

078-200-6874 / **mitzho84@gmail.com**

HP ＝ **https://mitzho84.wixsite.com/ampp**

blog ＝ **https://mitzho84.hatenablog.com/**

X ＝**@mitzho_nakata**

Printed in Japan

Made in Kobe